

江 馬 成 也
え ま せい や

学位の種類 教 育 学 博 士

学位記番号 教 第 9 号

学位授与年月日 昭和46年1月27日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 東北村落と若者組織

論文審査委員 (主査)

教授 竹 内 利 美

教授 佐々木 徹 郎

助教授 塚 本 哲 人

論 文 の 内 容 要 旨

「青年」の問題はつねに古くて新しい問題であり、おおくの教育的課題をひめた問題である。「青年」の研究は、したがって、すぐれて教育的研究の領域である。青年は、いずれの時代のまたいずれの社会にとっても、ひとしく進歩の原動力であり、文化を前進させるエネルギー源であった。もちろん、実際の場面にあっては、そうした機能のうらがわにその逆機能の側面があったことも問題となってくるのであるが、ともあれ青年階層は、それなりの実質的役割をいかなる場合にもそこでは果してきていたのである。また、その青年たちのつくる集団は、いずれの社会にあってもつねに基礎的集団の一つとして、社会的存在としての人間の在り方を決定すると同時に、人間形成にとって重要にして基本的な意味をもつものであった。

本論文は、その青年集団を東北村落においてとらえ、その特質を実証的研究をふまえて、農村社会学的見地から解明しようとするものである。

ところで、農村社会学の研究においては、日本の村落社会の内部構造の実証的究明は、かなり早くから着手されてきた領域であった。したがって、そこには数多くのすぐれた業績がある。だ

が、ここにおける大方の研究の関心は、村落社会の基本的な構成単位を「家」集団に措定して、その「家」相互がさまざまな生活協同の契機を通じて結合し、連合する仕方の類型設定におかれていた。そうした研究の動向から、まず「家」成立の系譜にもとづいて形づくられる定型的集団としての「同族団」がとり出され問題とされた。そして次いで、この「同族団」の研究と関連して、対置的に「親族」の仲間や「組」あるいは「講」といった集団の存在が着目され、その研究もやがて進められるようになった。こうした問題への関心は、もちろん日本の村落社会がもつ具体的性格から、おのずから取り上げられていったものとは思われるが、その後はいささかこれにのみ執着し、その概念的提示にだけとらわれて、もとより進められてきた実態的究明とその姿勢は、やや後退したきらいさえみせるものとなっていった。

確かに、そこで提出された「同族的結合」と「講組的結合」という二分論的類型設定によるその概念は、前者が上下的な家連合の型のものであれば、後者は平等的、並立的な型のものでありきわめて対照的に把えられ、魅力的にしてそれなりに有効な概念とも思われた。しかし、それを日本村落の構造把握の基本的な枠組として提示し、すべてをそれによって割切って理解することは、日本の村落社会がもつ問題を限定してしまうと同時に、それ自体にも多くの問題があったといわなければならない。

ここでは、日本の村落社会に伝統的に存続してきた青年集団としての「若者組」の究明は、研究の主流からはずされ、それはむしろ民俗学の分野からもっぱら進められていった。だが、やや当然のこととはいえ、民俗学的観点なり手法によって「若者組」だけがここではとり出され、それをめぐる諸種の習俗なり慣行のみに関心が集中されていった。もちろん、その作業を通して、この問題にかかわる貴重な資料が集積され、また非常に示唆に富んだ指摘もそのなかではおこなわれている。しかし、この「若者組」がどのようにその母胎としての村落社会の構造と連関しているのか、つまり村落社会における青年組織のもつ地位なり役割の問題や村落社会の変容に伴う「若者組」の変質・再編成という問題についての確明は、やはりほどこされてはこなかったし、そこからは生れてもこなかった。

それに、この民俗学的視角から探ねられてきた「若者組」は、地域的にはいちじるしく西南地方の村落の場合にのみかぎられ、したがって東北地方の村落は、この研究領域からいつしか除外されていた。さらに、前述した農村社会学の分野から提出された類型設定が、日本の村落社会の歴史的発展過程を説明する類型であったと同時に、西南と東北の地方に地域を二分して、村落社会の性格をとらえる類型の提示でもあったところから、その後に進められた「若者組」の研究では、この二つの分野からのものが癒着し、概念的な把握にのみとどまり、この問題領域においても実態的究明の作業は後退していった。

以上のような問題意識なり通念的観点から見れば、確かにやや特殊な姿で存在する東北地

方の青年組織は、研究の俎上にのぼってはこない。しかし、いわゆる“若いもの”たちがつくる集団組織は、ここにおいても決してないわけではなく、また他の社会の場合と同様に、彼らもここにおいてきわめて重要な役割を果たしてきていたのである。したがって、東北地方の村落社会に見られるそうした“若い者”の組織の研究は新たな研究視角から照明が当てられなければならないし、未だ多く手のつけられていない領域であったところから、今後ともより重要な研究課題となりつつなければならぬと考える。

本論文においては、前述してきた従来までの研究の成果を十分にふまえながらも、なお方法論的には、そうした意味において批判的な立場から、この“若い者”の組織を村落構造との連関においてとらえた実証的な調査研究の成果を論述する。

本論文の構成は、大きくは第一編と第二編の二つからなっており、その前編において前述してきた問題の展開が主としておこなわれる。まず、はじめの第一章では、私の問題意識とそれに迫る方法論について論述される。ここでは、さきにも述べた既成の通念的概念とはうらはらに、東北の村落社会にかなり広く存在しており、それなりに村落社会の性格を大きく規制している性別・年序別の集団体系に着目し、それとの連関から「若者組織」をとり上げるその研究の視角を説明する。そして、第二章以下では、この地方に見られる「若者組織」の構造と機能を特殊具体的な村落生活のレベルにおいて集中的に分析し、ここにおける青年集団の特質を抽出し、体系的な把握をこころみる。しかし、既に述べたように、問題が未開拓の分野に属するので、今後にも一層研究が深められてゆくのに役立つようできるだけ基礎的資料を加えてゆくようにもあえてこころがけた。後編は、東北農村がおかれている現在の状況のなかで、青少年たちがかかえているきわめて直接的にして切実な今日の問題に焦点をあて、その課題に対する彼らの意識の存在形態を問うたものである。この意識論は、それなりにまた独自の研究領域をなすものではあるが、参考論文の意味を担うものとしてここに付け加えた。

ともあれ、ことさら再び説くまでもなく、教育の社会学的研究において「青年」をめぐる研究の占める比重は大きい。本論文は、確かに直接的には教育現象におよぶ場面は多くはないが、広く見れば教育社会学の命題に密接につながっている基礎的研究にはかならないのである。

論文審査結果の要旨

本論文は村落社会における青少年教育の体制整備にかかわる基礎的研究として、東北村落の若者組織の実態を、村落構造と対応させて体系的に把握し、さらにそれが、明治以降の地方自治制度の確立過程や社会教育方策の浸透過程などと、どのように関連しつつ展開してきたかを実証して、農村青年教育の問題点を指摘しようとしたもので、全編の構成はおよそ次のようである。

序論 課題と方法

第Ⅰ編 東北村落と若者組織

第1章 東北村落と若者組織の展開——総論

第2章 地方行政の展開と若者組織

第3章 祭祀行事の伝統と若者組織

第4章 農業経営の変容と若者組織

第5章 漁業村落と若者組織

第6章 山村の構造と若者組織

第7章 青年団奨励助長策と若者組織の対応

補章 村の生活と子どもの組織

第Ⅱ編 東北村落における農村青年の社会意識

第1章 就農青少年の生活意識

第2章 「農業後継者問題」をめぐる意識

第Ⅰ編は本論文の主体をなすところで、すべて現地踏査によるオリジナルな資料にもとづき、それぞれ独自の分析視角から若者組織の実態を、特定村落に即して究明した7編のモノグラフィックな論考と、それらを理論的に集約した総論的部分とで構成されている。まず第3章では下北漁村における村氏神祭祀の行事分担方式が手がかりに、村落社会のインナーグループシステムとして存在する「性と年序による集団体系」の実態を究明して、いわゆる「年令階梯制」の中核体としての若者組の原型をそこにさぐりあてようとしている。この事例自体がすでに新しい学的発見であって、東北型若者組織の伝統的特質が、あざやかにそこでは浮彫りされている。第5章は牡鹿半島のいくつかの漁村について、そうした若者組織の存在形態を、地先漁場の共同用益を基盤に成立した村落構造全般のうちに位置づけつつ解明し、特に明治期以降の展開過程を克明に追求している。下北漁村とはほぼ同型の年序階梯的集団系列とその中核をなす若者組の存在が、そこにも確認されるが、さらに筆者は村落内部の生活条件の変化と、外部社会の働きかけに対応しつつ、そうした原型的なものが村人自体の手でいくたびか編成替えを加えられ、村落ごとに分化変容して行った経過にも、深い注意を払っている。第6章は同様の実証を船形山麓の一山村に即してこころみためたもので、生活条件の相違にもかかわらず、ここにも同型の年令集団系列の存在が確認され、しかも共有山の用益形態の変化とともに、その組織も変容を重ねる経緯をあきらかにしている。第4章は福島県における戦後農村の一事例をとりあげ、養蚕から果樹栽培への移行という農業経営の変革期に、その原動力として活躍した「青年連盟」なる運動体の消長経過を詳細に検証したものである。それは伝統的な若者組織の拡大再生産にはかならず、それゆえに大きな実績を示しえたが、また同時に新しい情勢に適応しえぬ体質の限容性をも暴露した点を指摘してい

方の青年組織は、研究の俎上にのぼってはこない。しかし、いわゆる“若いもの”たちがつくる集団組織は、ここにおいても決してないわけではなく、また他の社会の場合と同様に、彼らもそこにおいてきわめて重要な役割を果たしてきていたのである。したがって、東北地方の村落社会に見られるそうした“若い者”の組織の研究は新たな研究視角から照明が当てられなければならないし、未だ多く手のつけられていない領域であったところから、今後ともより重要な研究課題となりつづけなければならないと考える。

本論文においては、前述してきた従来までの研究の成果を充分にふまえながらも、なお方法論的には、そうした意味において批判的な立場から、この“若い者”の組織を村落構造との連関においてとらえた実証的な調査研究の成果を論述する。

本論文の構成は、大きくは第一編と第二編の二つからなっており、その前編において前述してきた問題の展開が主としておこなわれる。まず、はじめの第一章では、私の問題意識とそれに迫る方法論について論述される。ここでは、さきにもべた既成の通念的概念とはうらはらに、東北の村落社会にかなり広く存在しており、それなりに村落社会の性格を大きく規制している性別・年序別の集団体系に着目し、それとの連関から「若者組織」をとり上げるその研究の視角を説明する。そして、第二章以下では、この地方に見られる「若者組織」の構造と機能を特殊具体的な村落生活のレベルにおいて集中的に分析し、ここにおける青年集団の特質を抽出し、体系的な把握をこころみる。しかし、既にのべたように、問題が未開拓の分野に属するので、今後にも一層研究が深められてゆくのに役立つようできるだけ基礎的資料を加えてゆくようにもあえてこころがけた。後編は、東北農村がおかれている現在のななかで、青少年たちがかかえているきわめて直接的にして切実な今日の問題に焦点をあて、その課題に対する彼らの意識の存在形態を問うたものである。この意識論は、それなりにまた独自の研究領域をなすものではあるが、参考論文の意味を担うものとしてここに付け加えた。

ともあれ、ことさら再び説くまでもなく、教育の社会学的研究において「青年」をめぐる研究の占める比重は大きい。本論文は、確かに直接的には教育現象におよぶ場面は多くはないが、広く見れば教育社会学の命題に密接につながっている基礎的研究にはかならないのである。

論文審査結果の要旨

本論文は村落社会における青少年教育の体制整備にかかわる基礎的研究として、東北村落の若者組織の実態を、村落構造と対応させて体系的に把握し、さらにそれが、明治以降の地方自治制度の確立過程や社会教育方策の滲透過程などと、どのように関連しつつ展開してきたかを実証して、農村青年教育の問題点を指摘しようとしたもので、全編の構成はおよそ次のようである。

ほぼその目的を達するに成功しているとみられる。従来のように「未婚青年層」だけを抽出した観察にとらわれず、ひろく村落全般の集団構造を見渡して、そこにインナーグループシステムの一つとして働いている「性と年齢による集体系」を検出したことが、その鍵であったといえてよい。つまり東北型の若者集団はそうした集体系の中核体としてとらえられているわけである。第Ⅰ編第1章はこうして検出された東北村落の若者集団の要約であり、まず男子側における若者組（若者契約）―戸主組（本契約）、女子側における嫁組（嫁講）―主婦組（婆講）という双系的な二分組織を中心として、それに隠居組あるいは子供組を時に加えた性別年序別集体系のうちに、それを位置づけつつ、その組織上の類別をこころみている。西南日本の村々とはちがって、未婚青年層で完結する型がそこにはみられず、「戸主と跡とり」ないしは「主婦と嫁」という二分システムが、いわば東北村落の年齢階梯制の特質であって、それゆえ若者集団も既婚青年をむしろ主力とする「跡とり層」が主構成員であり、未婚青年層で完結する形の西日本型とは、その点で対蹠的である。それゆえ、東北型の若者集団の組織類型も「戸主―跡とり」という二つの年齢層のかかわりあいを目安に類別するのが至当であると筆者は提言するのである。この点はかなり独創的な見解であって、従来の通説を説破するに充分であり、事実すでに学界誌に発表された筆者のいくつかの論考は、その点で高く評価されているのである。

第Ⅰ編第1章の後段では、こうした型の「年齢階梯制」が形成された要因についても、いくつかの独創的な見解を示してはいるが、その部分はまだ充分な説得力を持つとはいえない。ことに西日本の若者組織と対応させる用意に欠ける点が惜しまれるが、それは今後の研究に期待してもよからう。また、明治末期から進行した青年団の育成方策がおもに西日本型の若者集団をモデルにしたため、未婚青年層で完結する形の青年団の形成を東北村落は一様に強要された。そのためにひきおこされた混乱を、筆者は第Ⅰ編第7章その他随所に扱いつつも、総論的部分ではその集約をさけて、その意義を全般的に論じていない点は、いささか物足りない。また、青年団の助長方策が当初は内務省・文部省の合作であり、むしろ地方自治振興策としての面が先行したことは重要な着点であって、旧生出村の事例はその好個の標本であったが、その意義を総論にとりこまないままに済した点も、惜しまれるところである。つまり、個別的にいく新しい学的創見を提示した点に、本論文の価値は十分に認められ、筆者のすぐれた現地調査能力を物語ってはいるが、その理論的集約の面には、まだいくつかの欠陥がみとめられる。第2編の意識調査分析は、またそれだけで一つの論考に発展する可能性を持ち、筆者の社会調査技術の練達ぶりとその分析処理の手がたさをよく示してはいるが、同様の欠点はなおそこにもみられないことはない。

以上のように、若干理論的処理の面で本論文は未熟の点を指摘しうるが、独創的な着点から従来の通説をはばくつがえして、新しい学的貢献をなした点は高く評価さるべきであり、何よりここでは筆者の社会調査と資料処理の技法に卓抜した能力をみとめるべきだと思うのである。よって本論文は教育学博士の学位を与えるに充分と認定する。